
あけぼの会。

海田 陽介

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

あけぼの会。

【Nコード】

N7455C

【作者名】

海田 陽介

【あらすじ】

大学を卒業してから東京でアルバイトをしながら小説家を目指している僕は、久しぶりに大学時代をすごした場所を訪ねる。そこで僕は懐かしい友人たちと再会して。

あけぼの会。

久しぶりの再会。

駅を降りると、懐かしい匂いがした。その見慣れた地味な風景は、僕がここをでていくときとなにひとつ変わっていないかった。バスのロータリーの方に歩いていくと、約束通り、太陽が車で迎えに来てくれていた。

車の助手席に乗り込むと、「久しぶりやなあ」と、太陽は懐かしそうに言った。

太陽というのはニックネームで、お酒を飲んでもいないのに顔が赤いところからそうつけられたのだけれど、最近では本名よりもニックネームの方が知られるようになってきていて、なかには彼の名前をほんとうに太陽だと信じ込んでいる人間もいるくらいだった。

「ほんと、久しぶりだよな」と、僕は言った。

太陽に会うのは実際にすごく久しぶりのことだった。最後に会ったのは先輩の結婚式があった去年のことだから、かれこれ一年近くが経っていた。一年振りに会う太陽は、仕事疲れのせいか、以前会ったときよりもだいぶ頬のあたりがやつれてしまったように思えた。回りの友達から彼が仕事のことで色々苦労しているらしいという話は聞いていたけれど、実際に彼の顔を見てみて、大変なんだろうなあ、と改めて感じた。

「どう？仕事の方は？」と、僕は尋ねてみた。

すると、彼は露骨に表情を歪ませて、

「ほんま、やってられへんで」と、答えた。

「週六回、朝から晩まで働いて、給料はたった十万やで。ほんま、

あけほの会。

やっつけられへん」

彼は続けてそう言と、何が可笑しいのか、愉快そう笑った。

その表情を見ていると、案外彼はそういう過酷な生活を楽しんでいるようにも思えてきた。

「でも週六回働いて、十万はキツイね。どこか他で働いた方がいいんじゃない？」

と、僕は試しに言ってみた。

月十万といえば、僕がアルバイトで稼ぎ出す金額と同じレベルだった。しかも、僕の場合は週四回から五回の労働ですむけれど、彼の場合は週六回、朝から晩までみっちり働かなければならない。ときには徹夜の作業になったりすることもあると聞くから、その労働条件は僕の想像を絶するところがあった。

「でもまあ、勉強させてもらって、お金までもらってると考えればなあ」

と、太陽は考え深げに答えた。

太陽は大学を卒業してから、個人経営の建築事務所で働いている。建築という業界は下積みの期間が長いらしく、彼のような大学を卒業したての人間は、どうしても働いているというよりは、働かせてもらっているという感じになってしまみたいだった。

「…大変なんだね」と、僕は何て言ったらいいのかわかなくてそう言った。

すると、彼は、

「ほんま大変やで」と、答えた。

それから、

あけほの会。

「吉田の方はどうなん？」と、訊いてきた。

僕の方はといえば、大阪の大学を卒業してから、東京にでて、アルバイトをしながら作家を目指すという生活を送っていた。将来の保証がないことや、回りに知り合いが少ないということを考えて、それなりに大変な部分もあったけれど、それでも太陽に比べればいくらかはマシなのかもしれない。

「どうなん？小説家には成れそうなん？」

と、太陽は横目でちらりと僕の顔を見ると、ポケットからタバコを取り出して、それに火をつけながら言った。

「…この前小さな公募で賞を取ったよ」と、僕は答えた。

「へー、マジで？すごいやん」

「と言っても、ちっちゃな賞だよ」

と、僕は口元で弱く微笑しながら答えた。

「でも、雑誌とかに掲載されんちゃうん？」

「まあ、そうだけど、誰も読まないような小さな雑誌だからそんなに大したことないよ。小説家成るにはもっと大きな賞を取らなきゃね」

「そうなんや。…で、大きな賞とかには投稿してんの？」

太陽はそう言うてから、思い出したようにタバコを吸った。

「この前一本投稿した」

「どうなん？いけそうなん？」

「うーん、何ともいえないね」

「…取れてるといいな」

太陽はそう言うつと、タバコの煙をゆっくりと吐き出した。

あけぼの会。

「まあね」

「賞取つたら、何かおごつてや」

「もちろん、何でも好きなものを」

僕はそう言つてから、少し笑つた。太陽も少し笑つた。

太陽は吸い終わったタバコを灰皿に捨てると、窓から駅の入り口の方へ視線を向けた。もう約束の時間は過ぎていくというのに、まだそこに池ちゃんの姿は見えなかった。もうひとり待ち合わせ予定の池ちゃんは、大学時代の友人で、彼は大学を卒業したあと、アルバイトをしながら公務員を目指すという生活を送っていた。

「池ちゃん何してんの？」

「知らん。池田のアホ」

太陽は笑いながら言つた。

僕も何となく可笑しくなつて笑つた。

すると、まるで僕たちが笑っていることを察知したかのように、駅の入り口の方から池ちゃんが歩いてきた。池ちゃんはべつに走りもしなければ、急ぎもしなかった。遠目ではわからないのだけれど、池ちゃんの顔は結構疲れているように見えた。

やがて池ちゃんは車のドアを開けると、後部座席に腰を下ろした。

池ちゃんは車に入ってくるなりに長いため息をついた。それから、

「あー、しんどかつたわ」と、くたびれた声をあげた。

「何がしんどかつたわけじゃ、ボケ」と、太陽が開口一番に言つた。

「…ちやうねん、俺これでも急いで来てんで。俺、今まで学校やつてんから」

「関係ないんじゃない」と、太陽がまた笑いながら毒づいた。

あけぼの会。

池ちゃんはアルバイトの合間に、週三回程公務員の専門学校に通っているみたいだった。

僕は後部座席を振り返ってから、「久しぶり」と言った。その声で池ちゃんをはじめ僕らの存在に気がついたらしく、

「おお、久しぶりやな」と、ちょっと驚いたような声で言った。

「もう、試験の結果わかったの？」と、僕が尋ねてみると、池ちゃんはいくらか困ったような表情を浮かべて、

「まだやねん。明日やな。結果がでるのわ」

と、不安そうな声で言った。

池ちゃんは今も既にいくつか内定をもらっているらしいのだけれど、まだ本命のところの結果がでていないみたいだった。

「受かってるといいね」と、僕は励ますように言った。

「絶対落ちてるわ」と、横から太陽がちゃかした。

その言葉に対して、

「なんでお前そんなこと言うねん」

と、池ちゃんは本気で嫌そうな顔をした。

すると太陽はまた面白がって、「絶対落ちてるわ」と、繰り返していた。

僕はそんな二人のやりとりを眺めながら、何故だか懐かしさが込み上げてきた。学生るときと何一つ変わっていないその感じがひどく愛おしくもあった。

「で、これからどうすんの？」と、池ちゃんが思い出したように尋ねてきた。

あけほの会。

「一応、石川あたりでバーベキューでもしようって話になってるん

「だけど」

僕はほぼ一年半ぶりくらいに大阪に戻ってきたのだけれど、四年間一人暮らしをしていた大学あたりの場所が懐かしくて、みんなで集まるうと提案したところ、じゃあバーベキューでもやろうかという話になったのだ。

「じゃあ、早よ準備せなあかんやん」と、池ちゃんは忠告するように入った。すると、また太陽が冗談半分に、「わかってるわ。お前が遅れたんじゃ、ボケ！」と、言った。

池ちゃんはいちいち相手にするのが面倒くさくなっただのか、今度はあっさり無視していた。

近くのスーパーで、適当にバーベキューのための買い物をする。僕たちはその足で石川に向かった。石川というのは大学の近くを流れている川のこと、僕たちは学生の頃、講義をさぼってはその原っぱでぼんやりしたり、みんなでサッカーをして遊んだりした。

石川の河川敷に降りると、橋の下あたりで大学の演劇部らしい集団が発声練習で大声をあげていた。他にも小さな子供連れの家族がちらほらいたり、犬の散歩をさせているひとたちの姿が目についた。

あけぼの会。

反対側の河川敷では小学生くらいの子供達が野球をしていた。いつの間にかあたりは夕暮れの光に包まれていて、遠くの空は口に含むと甘い味がしそうなやわらかなピンク色に染まっていた。山の中

腹あたりに太陽の光が赤く美しい光を滲みませながら沈んでいこう
と見えているのが見えた。

「他のみんなはどうしてんの？」と、池ちゃんがさっき買った食料
品を近くの芝生の上を下ろしながら言った。太陽はちらりと池ちや
んの方へ視線を向けると、

「さあ、もうすぐ来るんちゃう」

と、気のない声で答えた。「仕事終わってから車で来るって言っ
てたで」

「…そうなんや」と、池ちゃんは頷くと、しばらくの間何か考えて
いたけれど、「そういえば和華ちゃん、車買ったんやんな」と、咳
くように言った。

「何か和華ちゃんが車持つてるなんて変な感じするわ」

と、池ちゃんは首を傾げながら言った。

「今頃、走りやになってるで」と、太陽は笑いながら言った。

和華ちゃんというのは、サークルで知り合ってからずっと仲の良
かった女友達で、彼女は植栽関係の会社に就職して働いている。

確かに池ちゃんの言うとおり、彼女が自分の車を持っているとい
うのは変な感じがした。でもそれ以上に、彼女が会社員をしている
ということに違和感を覚えた。僕はフリーターで、学生のとときとそ
れほど変わらない生活を送っていたから、まわりのみんなが社会人
であるということに、いくら戸惑いを覚えてしまってもところがあっ
た。

あけぼの会。

結局、和華ちゃんがやってきたのは、バーベキューの準備が全て
整ってからだだった。和華ちゃんの姿と一緒に佳代ちゃんの姿もあっ

た。彼女もサークルで知り合ってからずっと仲の良かった女友達で、彼女は花屋さんでアルバイトをしている。

彼女は大学を卒業してから一度アロマセラピー関係の会社に就職していたのだけれど、色々と事情があつてその会社を辞めてしまつていた。

「ごめん。ごめん。」と、和華ちゃんはその可愛らしい声で謝つた。彼女の声はやわらかいな、と僕はいつも思つてしまう。「ほんまはもつと早く来れるはずやつてんけどな、ひとつ仕事が終わらんくてな、それで遅れてしまつてん。それに佳代ちゃんも迎えに行かなあかんかつたしなあ……」

「ごめん」と、和華ちゃんの横から佳代ちゃんが謝つた。

「どうせやつたら一緒に行こうと思つてな、和華ちゃんに車で迎えに来てもらつてん。けどな、こんなに遅くなると思つてなくてなあ。ごめんな」

何はともあれ久しぶりにみんなに会えたのは嬉しかった。仕事の関係で結局これなかつた人間もちらほらいたけれど、これで大学時代に仲の良かった人間がほぼ揃つたことになった。明日は土曜日で休みだし、今日はみんなある程度のんびりすることができる。学生の頃あんなにあつた時間が、今は驚くほど限られものになつてしまつていた。

缶ビールで乾杯してから、おのおのに紙皿に肉を取つて食べた。

その頃にはあたりはすっかり暗くなつていて、頼りになるのは、太陽が持ってきたキャンプ用の簡易照明だけだった。

飲み食いしながら、それぞれの近況について報告し会つたけれど、

あけほの会。

なかでも一番驚かされたのは、和華ちゃんが結婚するかもしれない、という話だった。

「まだ具体的に決まったわけじゃないで」

と、和華ちゃんはいいわけするように言った。

「でも、石川くんにだいたいそんな感じのことを言われたんでしょ？」

と、僕が訊くと、和華ちゃんはお酒のせいもあるのだろうけれど、頬を赤らめて照れ笑いをした。それからふっと彼女は真剣な表情を浮かべると、

「でもなあ、ちょっと迷ってんねん」

と、弱い声で言った。

和華ちゃんが今の彼とつき合いだしたのは大学二年の半ば頃のことだから、もうかれこれ四年のつき合いになるのか、と僕は思った。僕は今ままでそれほど長く誰かとつき合った試しがなかったから、その期間の長さに驚きを覚え、また羨ましくもあった。

今の感じでいくと、僕が結婚するのはいつのことになるのだろう、とちょっと途方に暮れるような思いがした。

「何を迷ってるの？」と、佳代ちゃんが訊くと、うん、と和華ちゃんは頷いてから、「大したことじゃないねんけどな」と、答えた。

「何かな、彼としては将来は地元に戻って何か自分で仕事が見たいみたいやねん。でもな、わたしはこっちに親もおるしな、できればこっちに残って親のを見てあげたいなって思ってたんねんな。

…だからな、どうしようかなって思ってたな」

「そっか」と、僕は頷いた。結構難しい問題だな、と思った。

あけほの会。

「イッシーにそのことは話してみたの？」と、佳代ちゃんが続けて尋ねると、和華ちゃんはいくらか神妙な顔付きをして頷いた。「そうやって言ったらな、じゃあ、今から頑張って公務員になろうかなって言い出しとる。それやったら大阪でずっと仕事続けて行けるし、将来も安定するからって、趣味にも力入れられるしって」

「だったら、それでいいんじゃない？」と、池ちゃんが言うと、

和華ちゃんは池ちゃんの方へ視線を向けて、

「でもな、本人に他にやりたいことがあるのに、わたしの都合でそうしてしまうもいいのかなって思ってしまうねん」

と、声のなかに迷いを滲ませながら言った。

「太陽はどう思う？」と、僕が振ると、太陽はいくらか複雑な表情を浮かべて、「本人がそれで良いって言ってんやつたらいいんじゃない？」と、答えた。

どうやらこの話に結論は見出せそうになかった。あとは本人が判断して決めるしかないことだった。それに、正式に決まったわけじゃないにせよ、結婚が決まったということは良いことだと思った。

「でも和華ちゃんが羨ましいわ。だってな、うちのなかで一番最初に運命のひとと巡り会ったわけやで」と、佳代ちゃんは憧れのもった眼差しを和華ちゃんの顔に注ぎながら言った。

すると、和華ちゃんはもとの明るい微笑を口元に広げて、

「…運命ってそんな大げさなものじゃないで」と、照れくさそうに答えた。

「みんなはどうなん？最近いいひとできた？」

あけぼの会。

と、佳代ちゃんはそう言いながら、反応を伺うように周囲を見回した。

僕は佳代ちゃんの視線を避けて、顔を俯けなければならなかった。他のみんなもだいたい僕と似たような感じだった。

僕の恋愛の成果は東京でも相変わらずあんまりパツとしていなかったし、池ちゃんにしても最近別れたばかりだった。太陽に関しては大学四年のときに出来た彼女がいるはずだったけれど、卒業してからどうなったのか詳しいことはよくわからなかった。でも、何も言わないところを見ると、あまり上手くいっていないのかもしれない。なかった。

「みんな頑張なあかんで」と、佳代ちゃんはみんなの反応を後目に、妙におどけた調子で言った。

「自分はどうなん？八木くんとは上手くいってん？」

と、横から池ちゃんがちやかすように尋ねると、

佳代ちゃんは複雑な感じの笑みを口元に浮かべて、

「まあまあやね」と、答えた。

佳代ちゃんが以前交際していた男と寄りを戻したという話は聞いていたけれど、その話を聞いて僕はやれやれと思っただけだった。

佳代ちゃんとその男は以前、別れ際にひどくもめたことがあったのだ。一時はほんとうにヤバイところまでいって、（彼女が別れたいといっても、男がなかなか別れさせてくれず、ほとんどストーリーカーの一步手前までいった）本人もそうとう懲りたはずだったのに、女心はわけがわからないな、と僕は感じた。

あけぼの会。

気がつくと、さっきまであんなにあつた食べものはあらかたなく

なってしまうっていた。僕は紙コップにウーロン茶を注いで飲んだ。

和華ちゃんもウーロン茶が欲しいと言ったので、持っていたペットボルト入りのお茶を彼女のコップにも注いでやった。

周囲の空間は青く透き通った闇に包まれていた。空に視線を向けると、南の空の高い位置に三日月が見えた。銀色の淡い光が夜空にぼんやりと滲むように広がっていた。月の明かりが強いせいか、回りに星は見えなかった。

近くの茂みのなかで、コオロギが鳴いているのが聞こえた。少し冷たい風が吹いて、木々の葉を静かに震わせていった。橋の上を走りすぎていく車の音が時折思い出したように聞こえてきた。照明に照らされて、闇のなかにぼんやりと浮かび上がっている橋を見てみると、どうしてか寂しいような、哀しいような、そんなしんみりとした気持ちになった。

僕たちの未来はきつと。

「みんな運命って信じる？」と、しばらくしてから和華ちゃんが言った。

「運命？」と、僕は彼女の言葉を繰り返した。

「…こんなことを言うとな、変に思われるかもしれないけどな、わたしな、ときどき運命について考えたりすんねん」

和華ちゃんはそう言うと、何かを誤魔化すように口元で少し笑った。みんな和華ちゃんの言葉の続きを待つように黙っていた。

「だってな、わたしがどんなに自分の人生を自分で決めてきたつもりでおつてもな、そこで出会うひととか、生まれる場所とか、能力とか、そういうのって自分で選ぶことってできひんやん。たとえばわたしは大学に入ってからこうしてみんなに出会って仲良くしとるわけやけど、みんなに出会うことはわたしの意志ではきめられへんやん。…だからうちらは出会うべくして出会って、今こうやって一緒にいるんかなって思ったりすんねん」

「なんかそういうのって素敵やね」

と、佳代ちゃんが感心したというよりは興奮した感じで言った。

太陽は、「なるほどなあ」と、考え深い表情を浮かべた。

池ちゃんは和華ちゃんの言葉に何か考え込むような表情を浮かべてしばらくの間黙っていたけれど、

「でももしそうやったとしたら、俺等が今後どうなっていくかっていうのも全部決まってるっていうことになるよな」

と、ぼんやりとした口調で言った。

あけぼの会。

和華ちゃんは池ちゃんの間について少しの間考えていたけれど、「そうかもしれないな」と、やがて静かな声で頷いた。

「でもそれってちょっと怖いよな」と、太陽が横から感想を述べた。「だってな、いま俺は建築家に成りたいと思ってるわけやけどな、もしそういう運命みたいなものがあつたとするやん。それでな、自分が絶対に建築家に成れへんってわかつたら、全然やる気が起こらへんもん。ていうか、そんなのあつて欲しくないな」

「だからそのために、運命っていうのは誰にもわからないようになってるんちゃう？運命みたいなものは確かにあるんやけど、でもそれは誰にもわからないようになってるみたいな感じやねん。きつと」太陽の言葉に、珍しく佳代ちゃんが論理めいたことを口にした。太陽は佳代ちゃんの言葉にうーんと、唸った。

「でも確かに運命みたいなものはあるのかもしれないよね」と、僕は言った。「ひとえに運命といつても、いくつかの分岐点みたいなものはあると思うけど、でも最初からある程度自分が選び取れる未来って決まってるような気がする」

「…まあ、確かにそうかもしれないよな」と、池ちゃんが弱い声で僕の言葉に同意した。「だって俺がどう頑張ってもアメリカの大統領にはなれへんもんな」

僕は池ちゃんがアメリカの大統領になっているところを想像してみただけれど、それは上手くいかなかった。というよりも、途中で笑えてきて駄目だった。

あけぼの会。

でも、その例えはともかくとしても、やっぱり最初からある程度未来は決まっているものなのかもしれないな、と思った。そして、

もしそうだとすれば、これから僕の未来はどうなるのだろう、と少し不安な気持ちになった。

ふと橋の向こう側に視線を向けてみると、そこは夜の闇に包まれて何も見えなかった。遠くの方に、ガソリンスタンドの看板が光っているのが見えるだけだった。闇のなかで、その光はひどく頼りないものに見えた。まるでそれは行き止まりを告げるサインのようにも思えた。

「でもまあ、そんなこと言っただけではじまらへんで。運命があるにしても、ないにしても、俺等は自分なりにベストを尽くしていくことしかできひんねんから」
と、太陽がしばらくしてから静かな口調で言った。

「太陽もたまにはいいこと言うよな」と、横で佳代ちゃんがひやかすと、太陽は笑いながら、「いつもやがな」と、おどけた調子で答えていた。

僕はそんなふたりのやりとりを遠くに聞きながら、確かにその通りかもしれないな、と思っていた。いずれにしても、僕は僕にやれるだけのことをやるしかないのだ。たとえ結果として自分の目標にたどり着くことができなかつたとしても、そのために必至に努力すれば、そこから新しく何か見えてくるものあるはずだ、と思った。

あるいはそれはあまりにも楽観的過ぎる考えなのかもしれないが、たけれど、でも今はそう信じていたい気持ちがあつたし、妙に悲観的な気持ちになつたりするよりは、ずっと健康的で良い考えだと思つた。

あけぼの会。
ふと川の方へ視線を向けてみると、川の水面は橋の光を映して優

しく煌めいていた。夜の色素が溶け込んだ暗い水面に、橋の光がやわらかく滲むように広がっていた。月の光をそのまま水に溶かしたような、白っぽい、冷たい光だった。

弱い風が耳元を吹きすぎていった。その風に耳を澄ませてみると、意識のどこか奥底から何か懐かしい声が聞こえてくるような気がした。僕はそんな声に耳を傾けながら、大学生の頃にみんなと過ごした多くの時間や、昔好きだった女の子のことを思い出したりした。

バーベキューの片付けをすませたあと、どうしようかという話になって、結局みんなで「てんとうむし」にもでも行こうという話になった。「てんとうむし」というのはカラオケとビリヤードと卓球とマンガ喫茶がひとつになった店のことで、僕たちは学生の頃、何かイベントがある度にそこで遊んだものだった。

さすがに金曜の夜ということもあって、店はそれなりに混雑していたけれど、でもだからといって全く遊べないという程ではなかった。

取り敢えずという感じでビリヤードをして遊んだ。僕は全くビリヤードはだめだったから、一度も勝てなかった。池ちゃんと太陽がムキになって張り合っていたけれど、最終的には池ちゃんが勝利を収めていた。そのあとは卓球をして遊んだ。そこでは和華ちゃんが一位になっていた。僕は卓球でも一度も勝つことができなかった。僕はさつきから負けてばかりいた。卓球にも飽きると、みんなでカ

あけぼの会。

ラオケをした。

最近流行の曲を聴かなくなっていたから、僕はあまり歌える曲がなかった。唯一新しい曲で知っていたのは、くるりのバラの花だったけれど、でもそれもあまり上手く歌えたとはいえなかった。というか、かなりボロボロだった。というわけで、僕は比較的歌い慣れているイエローモンキーの歌ばかり歌った。歌いながら、イエローモンキーはまた活動を再開しないのかな、とぼんやりと思ったりした。

カラオケに餓えていたのか、太陽と池ちゃんは張り切って色々な歌を歌いまくっていた。太陽はちよつと無理して矢井田瞳の歌にまで手を伸ばしていた。男の声なのでいくらか違和感はあるけれど、でもそれはそれで悪くない感じだった。池ちゃんはミスターチルドレンの歌ばかり歌っていた。和華ちゃんと佳代ちゃんはエブリトルシングやジュディアンドマリイ等の、可愛らしい感じの曲を歌っていた。

そのうち、僕は歌いたいと思う曲がひとつもなくなってしまった。だから僕はカラオケルームをそつと抜けると、ふらふらとマンガ喫茶の方へ歩いていった。

マンガ喫茶には誰もいなかった。久しぶりに歌ったせいか、喉がひどく痛んでいた。途中でドリンクバーでオレンジジュースをグラスに汲んだ。それから、目についたドラえもんの本を一冊手に取り、それとオレンジジュースを持って窓際の席を選んで座った。

あけぼの会。

マンガ喫茶には音楽は何もかかっていた。ビリヤード場で玉を突く音と、カラオケルームからときおり歌声が漏れてくるだけだった。何気なく窓の外に視線を向けると、もういつの間にか夜は

明けかかっていた。空は綺麗な青白色に染まっていた。耳澄ますと、気の早い小鳥たちさわやかな声で鳴いているのが聞こえた。とても静かな朝だった。

僕は適当にページを開いて読んだ。それはドラえもんが未来に帰っていく話だった。のび太はドラえもんが未来に帰っていくと知って、ドラえもんが安心して未来に帰れるように、自分は強くならなければならぬと決意する。そしてのび太はシャイアンと対決するのだけれど、シャイアンにボコボコに打ちのめされながら、それでも諦めずに、何度も何度も立ち上がっていく。

そして最終的にはシャイアンが負けを認めて、晴れてドラえもんは安心して未来に帰ることができる。そういう話だった。読み終わったあと、とても穏やかで清々しい気持ちになることができた。よくわからないけれど、頑張っていたという気持ちになれた。

「何読んでるの?」と、ふいに近くで声が聞こえた。顔を上げてみると、目の前の席に和華ちゃんが座っていた。いつからそこに座っていたのか、ドラえもんは夢中になっていたせいで、全然気がつかなかったのだ。

「ドラえもんだよ」と、僕は答えた。「ドラえもんが未来に帰っていく話し」

僕がそう言うと、和華ちゃんはいくらか懐かしそうに頬を輝かせた。

そして、

「わたしもその話し好きやで」と、言った。「すごい感動するよな」僕は和華ちゃんの言葉に頷いた。

「もうカラオケはいいの?」と、僕が尋ねると、和華ちゃんは大きく欠伸をして、「眠くなってきた」と、少し笑いながら言った。僕

もつられるようにして少し笑った。言われてみると、すごく眠たい気がした。

「東京には今日帰るの?」と、和華ちゃんが尋ねてきた。

僕は、うん、と頷いてから、「太陽の家で少し寝かせてもらってから、夜行バスで帰るよ」と、僕は答えた。

すると、和華ちゃんは少しの間黙っていて、それから、「…また寂しくなるな」と、ちよつと弱い声で言った。僕は、そうだね、と頷いてから、曖昧に微笑んだ。

「また東京にも遊びに来てよ」と、僕は言った。和華ちゃんは僕の言葉に頷くと、「そうやね。今度連休取れたらいくわ」と、言った。

わずかな沈黙があつた。その沈黙に混ざって、太陽の歌声が聞こえてきた。キーが高いところを無理して歌っているのか、その声は完全に裏返ってしまった。それが可笑しくて僕はちよつと笑った。和華ちゃんもカラオケルームの方へ視線を向けると、可笑しそうに口元を綻ばせた。

「どう?仕事は順調?」と、僕は何を話したらいいのかわなくてそう尋ねてみた。すると、和華ちゃんは少し迷ってから、「まあまあやな」と、口元で曖昧に微笑しながら答えた。

「でも今結構楽しくなってきた。庭のデザインとか任されてんねん」

「へー。すごい」

「やる?」と、言って和華ちゃんは軽く笑うと、「でもそのぶん、それなりに大変やけどな」と、続けて、ちよつと疲れた感じの笑みを口元の隅に浮かべた。

あけぼの会。

「吉田くんはどうなん？書いてんの？小説は？」
「うん、こつちもまあまあだよ」と、僕は答えた。
「頑張つて小説家になつてな」と、和華ちゃんはからかうように言った。僕は何て答えたらいいいのかわからなくて、曖昧に頷いて誤魔化した。

朝日の光が店のなかに優しく差し込んできていた。

店をでると、もうすっかり朝になっていた。遠くの山の稜線に太陽の紅い光が滲むように広がっていた。その光が目眩しかった。というよりも、世界全体が目眩しく感じられた。思えば、こうやってみんなで朝日を眺めるのはずいぶん久しぶりのような気がした。

「それじゃ、また遊ぼうね」と、和華ちゃんが言った。

「次に会えんの、いつになるかわからんけどな」と、太陽が苦笑めいた微笑を口元に浮かべながら言った。

「次に会えるのはお正月くらいやろうな」と、佳代ちゃんが残念そうに言った。

「吉田はどうすん？お正月こつちに帰つてくんの？」と、池ちゃんがこちらを振り返りながら尋ねた。

僕はそれについて考えてみたけれど、それはお金との相談で、今のところ何ともいえなかった。

和華ちゃんと佳代ちゃんの二人とは店の前で別れた。二人は来たときと同じように車で帰っていた。まだそのときになつても、和華ちゃんが自分の車を持っているという現実を、僕はいまひとつ飲み込めないでいた。

あけぼの会。

あけぼの会。

それから僕たちは男三人で騒ぎながら帰った。帰りの車のなかではずいぶんくだらないことをたくさん喋った。何しろ眠くてお互いに何を喋っているのかよくわからない状態だった。みんなテンションだけで喋っていた。でも、そんな感じが心地よくもあったし、楽しくもあった。すごく懐かしい感じがした。

帰りの車のなかで僕は色々なことを想った。昨日から今日にかけてみんなと過ごした時間や、和華ちゃんが結婚するということや、これから将来のことや、小説のこと……なかでも一番気になったのは、明後日のバイトのことだった。何しろ朝六からバイトなのだ。ちゃんと起きれるかどうか、それが一番心配だった。

いずれにしても、まだ日は昇ったばかりだった。僕はきつく目を閉じ、それからゆっくりと閉じていた瞼を開いてみた。するとそこには、目映いばかりの世界が広がっていた。

あけぼの会。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7455c/>

あけぼの会。

2009年7月1日21時18分発行